

西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.23 2007年7月号

今月はひろさちやさんの本から、仏教のお経に出てくるといふ、4人の奥さんを持っている男の話をご紹介します。

男は第一夫人をこよなく愛していました。夫人にお腹がすいたと言われればおいしいものを食べさせ、暑いと言われればうちわで扇いでやりました。第二夫人、第三夫人に会う回数は第一夫人よりも少なかったようですが、会えば第一夫人と同じようにやさしくしてあげたそうです。ところが、第四夫人はいつも男のそばにいるにもかかわらず、男はその存在すら忘れていふようで、声もかけてあげなかったそうです。

あるとき、男は外国への長い旅に出ることになりました。そこで、1人で行くのは寂しいと第一夫人を誘ったところ、「私はこの国で贅沢をさせてくれるから一緒にいるだけで、どんな苦勞が待っているかわからない外国へは行きたくない」と断られてしまいます。男はあんなに可愛がっているのにと腹を立てますが、気を取り直して第二夫人を誘います。ところが、第二夫人からも同じ理由で断られてしまいます。しかたなく第三夫人を誘ったところ、「第一夫人も第二夫人も冷たいですね。私は国境までお見送りしましょう。でも、そこから先はあなた1人で行ってください。」と言われてしまいました。ここでようやく男は第四夫人の存在を思い出し、お供をしていふように頼むと、彼女は「わかりました。あなたについていきます。」と答えてくれたそうです。

これは寓話で、それぞれがある事柄を象徴しているそうです。「外国への長い旅」というのは、「死」を意味しているそうです。そして第一夫人は「人間の肉体」、第二夫人は「財産」、第三夫人は「子供」だそうです。子供は、お葬式、野辺送りまではしてくれますが、それ以上のことはしてくれないというわけでは、死後の世界までついてきてくれる第四夫人というものは何を象徴しているのでしょうか？

ひろさんによれば、第四夫人というものは生きていたときの思い出だそうです。あの世に持って行けるのは思い出だけだから、この人生でやるべきことは、少しでもいい行いをして、いい思い出をつくることなのかもしれません。

